

園芸体験で脳が活性化

県立淡路景観園芸学校実証 認知症予防に期待

寄せ植えなどの体験を通じて認知症高齢者らの精神機能回復を目指す園芸療法について県立淡路景観園芸学校（淡路市野島常盤）は、前頭葉の一部の血液量増加と脳細胞の活動活発化を裏付ける科学的な効果を実証した。二十八日に神戸市で開かれる「第二十三回日本老年精神医学会」で発表する。豊田正博・同校景観園芸専門員（四）は「園芸が認知症予防に役立つ可能性を示した」としている。

（西尾和高）

あす学会で発表

同校は養成した園芸療法士を二〇〇六年から福祉施設などに派遣。神戸など約十五カ所で行ったという声がある一方

で、医学的な治療効果は実証されていなかったため、昨年六月、実験に取り組んだ。

ロビン濃度が上がったのは、血液量が増えて脳細胞の活動が活発になった証拠」と指摘。「花を植えた行動に一番強く反応した」ということは、園芸療法の効果について貴重な根拠となる」という。今回は健康者での実験だったが「認知症高齢者でも同じ結果が期待できると思う」とし、園芸療法の一層の普及に期待している。



寄せ植えなどを通じ、お年寄りらの心を解きほぐす園芸療法——淡路市大町畑

実験は十一・六十代の健康者十七人（男二人、女十五人）が対象。脳の血液量の変化を探るため、大脳皮質に赤外線を当てて酸化ヘモグロビン濃度を測った。鉢で土を混ぜる▽土を鉢に入れる▽花を鉢に植える▽鉢に土を入れず混ぜる動きだけの四類型の行動で一人三十分間ずつ実施した。

思考や想像、判断など高度な精神活動をつかさどる前頭葉の最前部で、血中の酸化ヘモグロビン濃度は「花を鉢に植える」が最高値を記録。以下は「土を混ぜる」「土を鉢に入れる」の順で「混ぜる動きだけは最低だった。豊田専門員は「ヘモグ

平成20年6月27日(金)
神戸新聞朝刊
27 頁 地域こころ版